

## 鈴木高靱宛古川松根書簡

三ツ松 誠

①十月二十六日（前欠）

式部、南里・重松への御書

共、夫々相達候、其節之御返事

ハ呈出置候、定而御落

掌と奉存候、其已前

之賜書、漸ク一兩日前

入手奉拝誦候、時下益

御多祥御起居之条、奉

怡喜候、玉石集并

鶯蛙集御恵投

被成下正ニ落手、驚候也、

就中玉石御精撰之程、

奉敬服候、近頃諸方ニテ

撰出有之趣、向々へも愚詠

御送り被下候よし、御厚意

忝被存候、草場へ之御新物

萩焼一リンいけ共々

早々遣し置候、近々出来

之上差出可申候、又古萩

之磁硯可給旨、尚更難

有と而、古雅ナルベクと

先おもひやり奉り候、能キ

便り之節御送り被下様

奉希候、重而御書給り候ハゞ、

先日申上候城下本通り

ニテハ呉服町本陣

野口丈次郎、又別筋へ

通り候便りナラバ材木町

野中元右衛門と申薬店

へ、御届被下候ハゞ直様相達し

申候、下ノ関諸岡作左衛門

迄被差出候ても宜御座候、

先ハ左之御札御答候、

例之草略乱毫御

海涵奉希候、頓首

古川松根

十月廿六日

鈴木先生

侍史

※高輦から「古萩之磁硯」を送ると言われた松根は、都合の良いときに、と応じている。②ではそれについて重宝している旨を述べており、草場（佩川か）への進物の件も合わせ、①が②に先立つように見える。とはいえ既に嘉永四年十月刊行と言われる『玉石集』、嘉永五年二月刊行と言われる『鶯蛙集』が届いているようでもある。

②嘉永五年三月二十九日

御嘉筆奉拝読

仕候、時下益御安

泰欣賀奉存候、野子

定て無異乍慮外

御憚心可被下候、此節古

萩之磁硯御恵投

被下、いと／＼雅なる物、直

様机上ニ取居とりなで重

宝仕候事、萬々真

奉多謝候、○

御年祭和歌并玉

石集二編上木御取かゝり

のよし、不遠御落成

之上ハ、と今より相楽

奉待候○いまだ程

遠き事ながら此ハ

必東行之折ハ拝顔

と今より相楽申候○小倉

氏御相對之節ハ宜

御致声奉希候○重松

へ之御状直様相達

置申候○近藤氏江戸

へ出られ候よし、今度ハ暫ク

逗留とも相成候や、如何

○草場兎角らちあけ

不申候、しかしもはや

格別手間とりハ仕間敷

ながら、段々延緩相成

候段、御海涵可被下候、先ハ

右御報御礼迄、例

之いそぎ草略乱毫

何分御ゆるし可被下候、頓首

三月廿九日 古川（花押）

鈴木先生

二白、御地辺如何候哉、

弊邑などハとかく此比

雨がちにてこまり申候

近来高詠ども伺

不申候、何卒篤と御

きかせ可被下奉希候

狐

小雨ふるもりの木のまに見ゆる哉

よめむかへする狐火のかげ

猫

影遠く月ハかすみてあづまやの

のきに更行からねこの声

犬

うつ杖の下をくぐりてあげまきニ  
ともなひあそぶ里の犬かな

御笑評可被下候 以上

※嘉永五年三月十三日の松根宛高鞆書簡を見ると、小倉氏のこと、年祭歌集・『玉石集』一一編纂開始のこと、近藤芳樹の動向のこと、宮城繡介||重松春香宛書状のことが書かれている。その返信だろう。江戸から帰ってきた直後で、周防行が遠い状況も合致する。

(山口県文書館所蔵古川松根書状

小川五郎収集資料 1293④ - 2 - 5・6)